



創立125周年

1885 - 2010

群像 創立者18人はこんな人



ボストン大学ロースクール初の日本人法学士



菊池 武夫

第2代東京法学院院长・初代中央大学学長

1854(嘉永7)～1912(明治45)／盛岡
 最初、耕蔵と命名され、のちに茂太郎と改名。通称香一郎。武夫は盛岡藩国学教授江幡五郎の撰による実名。藩校修文所に学び、維新後に上京し、大学南校に入学。1875年、第1回文部省留学生に選ばれ、小村寿太郎、鳩山和夫とともに渡米。ボストン大学ロースクールに学び、77年日本人で初めてバチェラーオブロー(法学士)の学位を取得。80年に帰国した後、司法省入省。86年司法大臣秘書官、91年民事局長に昇進するも辞職して、代言人となる。
 英吉利法律学校では、法学通論・代理法などを講義。弁護士としてまた法典調査会委員等を歴任し多忙を極めたが、徳望高く大学の要となって21年間院長・学長を務めた。会員との交流にも努め、北は北海道から南は九州、会員会支部のあった台湾にまで遠く足を運んだ。



三代を生き抜いた気高きバリスター



増島 六一郎

英吉利法律学校長・初代東京法学院院长

1857(安政4)～1948(昭和23)／彦根
 六一郎という名は、彦根藩弓術師範の父右衛門が61歳の時に誕生したことに由来する。藩校弘道館で神童と謳われた増島は、維新後に上京。開成学校から東京大学法学部へと進み、1879年首席で卒業し法学士となった。翌年、三菱の創業者岩崎弥太郎に見込まれて、イギリスの法曹院ミドルテンブルに留学。83年バリスター(法廷弁護士)の資格を得て、翌年帰国、代言人となった。「バリスター 法学士代言人」という独自の肩書きを用いて名を馳せ、明治、大正、昭和の3代にわたり弁護士として活躍。
 増島は、英吉利法律学校での法学教育を通じて品格ある法律家を育成するとともに、自ら判決録をまとめた「裁判粹誌」を編集発行するなどして英米法の普及に努めた。1926年、麻布の自邸に英文の法律書を納めた正求律書院(のち正求堂財団)を開設。英吉利法律学校では、訴訟法などを講義。